

# 小川政弘作「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」

《第2部 日本に遣わされて》

アナウンサー 中国での捕虜生活から解放されたスティーヴン・メカフ牧師は、彼の後半生を、キリストの愛を伝える宣教師としてかつての敵国、日本で過ごすことになりました。来日した1952年から1990年にイギリスに帰国するまでの38年の間、日本を愛し、日本に半生をささげた伝道の生涯を、彼の口から語っていただきましょう。では、小川政弘作、ノンフィクション「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」第2部「日本に遣わされて」、どうぞお聴きください。

## 【第1章 軽井沢日本語学校】

ナレーション こうして暑いオーストラリアから途中寄港地の香港を経て日本の神戸港に着いた私は、そこからまず軽井沢の OMF 本部の日本語学校に送られ、日本語を学ぶことになりました。他にも一緒に学ぶ宣教師たちがいましたが、その中には2人のルームメイト、オーストラリア人のデイヴ・ヘイマンと、のちに無二の親友となった同じイギリス人のダグ・エイブラハムズもいました。日本語の勉強が始まってすぐに、私は、自分の語学力の貧しさに、いきなり直面することになりました。

スティーヴン 働く、働いた、働き、働いて、働こう、働けば…働きたい、働きたかったら

ナレーション Work、“働く”という一つの言葉に、なんと26通りもの表現があるのです。私は必死に講義のメモを取っているうち、日本語というものの計り知れない奥深さを知らされました。加えて、英語ならアルファベットで全てが済むのに、日本語には漢字、平仮名、片仮名もある。本当に複雑でした。

日本語教師(大橋) では皆さん、一日に20ずつ、日本語の単語を覚えてください。それを正しく発音し、文法的な使い方をよく理解し、それを文章の中に入れて実際に使ってみてください。一週間に1度、テストをしますからね。

スティーヴン そんな！ ムリですよ先生！

日本語教師 いいえ、この国に宣教師として遣わされた人が、まずこの国の言葉をマスターするのはマストです！ そうですね、日本人の方々に親しみやすいように、スティーヴンにも日本の名前を付けてあげましょう。スティーヴンは、日本語の聖書では“ステパノ”です。はい、今日からあなたは“ステパノ・メカフ”、あなたを呼ぶときは“ステパノさん”。どうです？ いい名前でしょう？

ナレーション そのときはピンときませんでしたでしたが、日本人のクリスチャンの方々が私をそう呼ぶときは、何か尊敬を込めて言っているように感じられたので、まんざらでもあり

ませんでした。

また私は言葉だけでなく、欧米とはかなり異なったこの国の生活習慣や、この国の宗教的背景についても学んでいきました。仏教と神道という大きな 2 つの流れが、日本人の過去も現在も支配しているという事実も。また、私たちは日本語学校にいても、勉強だけしていたわけではありませんでした。私も、ルームメイトのデイヴもダグも、少しでも日本の人たちに福音を伝えたくて、うずうずしていたのです。入学した年、1952 年のクリスマスイヴに、私たち 3 人はミッション＝宣教団の車を借りて、トラクトという伝道用折り畳みチラシをどっさり積んで、近隣の村へ繰り出しました。道を通る人に、トラクトを配ると、決まって帰ってくる反応はこうでした。

村人(三俣)

いくらですか？

スティーヴ

え？

村人

買いますよ。これ、いくら払えばいいですか？

スティーヴ

え？ あ、あの、…タダです。あげます。一つ、どうぞ。

ナレーション

これも、こんな経験を通して学んだことですが、日本では、人に何かをあげると、もらった人は相手に対し、“お返し”の義務を負うのです。それが重荷な人は、むしろお金を払おうとするのでした。私たちはさらに新潟まで足を延ばし、妙高、そして赤倉のスキー場を訪れました。そしてスキーに来た人たちのグループの中に入って行って、信仰の証しをしては、トラクトを配ったのです。ある夕方、私は 30 人ぐらいのグループがたき火をしながらお茶を飲み、談笑しているところに入っていき、日本語の辞書を引き引き、一生懸命に証しをしました。私が何かへんなことを言ったり、言葉を間違えたりするたびに、彼らはどっと笑いました。私は、がっかりしながら、その場をあとにしたのですが、それからしばらくして、1 通の手紙を受け取ったのです。

日本人①(中尾)

(スティーヴが読んでいる)「あなたは私を救ってくれました。あなたのお話はとても印象的で(途中から、日本人の話し口調で)私の心を揺さぶりました。私はかつて日本陸軍の将校でした。私は、生きている限り、あなたが、あの雪の積もった山間<sup>やまあい</sup>で話してくださった聖書の話は忘れません。私はクリスチャンではありませんが、東京へ戻ってから、自分の聖書を読んでいます。さよなら。グッバイ。」

ナレーション

またある時は、こんなこともありました。ある土曜日、バッグにトラクトや伝道用小冊子を詰め込んで、勾配の急な軽井沢からジグザグ鉄道に乗って高崎に出た私は、帰路は鉄道の代わりにバスを使おうと思い立ちました。そこで私はバス停のベンチに座ってバスを待っていると、向かい側のベンチに、農家の奥さんとその息子の少年がいます。少年は竹の虫かごを持っていて、中には虫が入っていました。二人とも、外人の私を気にしているようです。

スティーヴ ナレーション その虫は、なんですか？  
少年は、恥ずかしそうに身をすくめて、母親を手で押しました。「代わりに返事をして」の合図のようです。

母親(中橋文) キリギリス。  
スティーヴ (たどたどしく)キ…リ…ギ…リ…ス。  
ナレーション 私はその言葉を、自分の日本語単語帳に書き込みました。それは、正式にはコオロギのことでしたが、私の国、イギリスと発音が似ていたの、思い切ってジョークを言ってみました。

スティーヴ 私は、キリギリス人。コオロギ人間です。  
男子(大橋) (笑)キリギリス人  
スティーヴ あなたのコオロギは、どんなことをしますか？  
男子 鳴く。  
スティーヴ 泣く？ 日本では、コオロギはおいおい泣くのですか！  
ナレーション 日本語の「なく」には、人間が「泣く」と鳥や虫が「鳴く」、意味が違う 2 つの漢字があるのを知ったのは、それからだいぶあとのことでした。  
夏休みには、また汽車で伝道旅行をしました。群馬県の長野原町に行ったのですが、駅前の旅館は夏休み客で満員でした。宿を探しながら、結構重いトラクトの入ったバッグを引きずったまま、通りを歩いて道行く人にトラクトを配りました。町外れにやっと一軒の宿を見つけ、畳の部屋に通されると、安心して気が緩み、うとうとしかけたその時――。

女中(三俣京子) お客さん、お風呂わきましたよ。どうぞお入りください。  
ナレーション 大きな声で宿の女中さんに起こされて、お風呂に案内されました。それまで見た日本の木の湯舟とは違い、そこのお風呂は銅製でした。湯の上に浮いている木のふたを取って中に入りましたが、足の裏が跳び上がるほど熱くてとても入れません。

スティーヴ (モノローグ)アチチチ！ どうやって入るんだ？ …あ、そうか！  
ナレーション 私がどうしたと思いますか？ 木のふたと思ったのは、それを沈めてその上に体を載せる底板だったのです！ 夕食は、至って質素な卵かけご飯でした。その女中さんは、私がそんな怖い人間ではないと見て取ったのか、食事の給仕をしている間、少しずつ話し始めました。

女中 それでね、お盆休みに秋田の田舎に帰るのがもう、たった一つの楽しみなんですよ。

スティーヴ お、オボン？ (モノローグ)お茶を載せるお盆が休む…。なるほど、お盆も休むんだ…。

女中 そうですよ。でなきゃ体が持たないもの。  
スティーヴ 体が持たない…。何を、持ちませんか？

女中 え？（笑い出す）お客さん、面白い人だねえ！

ナレーション それから私が食事を終わるまで、彼女は休む間もなくしゃべり続けました。

ステイーヴ ああ、そうですか。…なるほど。…おお、そうですか！

ナレーション 彼女の話の間中、私はいちいち、おうようこうなずいていたのですが、もちろん言っていることはただのひと言も分かりませんでした！

夕食の後、私は蚊帳の中に入って眠りに就いたのですが、またもやその女中さんに起こされました。なんと、この私に客人だというのです。現れた日本人は、着物を着た青年で、手に風呂敷を持っていました。頭を畳に付けばかりに深々とお辞儀をすると、彼は、風呂敷を開いて、日本語の新約聖書と、2冊の辞書と、数冊の日本語の本を取り出しました。私がそれまでに知った、静かで人見知りな日本人とは違って、彼は私の眠りを邪魔したことなど一切意に介さないふうで、単刀直入にこう言いました。

増田(東) 初めまして。私は増田と申します。今日、あなたからトラクトをもらって、ぜひ聖書を教えていただこうと思って、やって来ました。

ナレーション そう言うと、彼は新約聖書のページをめくりました。

増田 ここです。これはどういう意味ですか？ どうか教えてください。

ナレーション それまでまだもうろうとしていた私の頭は、突然、状況を理解しました。“このために私は日本に来たのだ”と。これが、私が駅前の旅館を断られた理由であり、重いトラクトバッグを2キロ近くも引きずり歩いた理由だったのです。

ステイーヴ おお、ローマ 3:23、「全ての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており…」これは、ですね、つまり、私たち人間は、神様の前で、皆、罪びとだということです。

増田 どうしてですか？ 罪びととは何か悪いことをして、牢屋に入ってる人たちでしょう。

ステイーヴ ええと、それはですね。もちろんそうですが、本当は違います。

増田 では、私も罪びとですか？ あなたもそうですか？

ナレーション こうして、夜の9時から始まった話は、2時間に及び、時計の針はいつしか11時を指していました。私は、彼の新しい質問が出るたびに、「彼がこの時計に気がついてくれますように」と祈るような気持ちでした。ひと言ごとに日本語の辞書を引きながら、日本語学校の2年間の授業をこの2時間で全部復習したような気分になった私は、もう頭の中が限界になり、こう言いました。

ステイーヴ 増田さん、ではお祈りしましょう。

増田 はい。

ステイーヴ そうしたら、私は寝ます。

増田 私も祈ります。

ナレーション それは、私が日本語学校のクラス以外のところで祈った初めての日本語の祈り

でした。私が祈り終えても、彼は目を閉じたまま、じっと静かにしています。

ステイーヴ あなたも祈りたいですか？

増田 あの、もうあなたの祈りは終わりましたか？

ステイーヴ はい。「アーメン」は祈りが終わったしです。

ナレーション うなずいた彼は、ペンを取り、紙に絵を描き始めました。

増田 これがお釈迦様。…これが神道の神様。…これは仏様、死んだ人間の魂です。  
…で、これがイエス・キリスト。どの神様に祈ればいいですかね？

ナレーション 私は少々がっかりしながらも、聖書の「使徒の働き」17 章を開いて、そこを読むように言いました。私は、彼が読んでいる間、静かに祈っていましたが、23 節まで読み進んだ時、彼は言いました。

増田 「知られざる神」？

ナレーション なおも読み進んでいった彼は、突然、顔をパッと輝かせて、こう言いました。

増田 私が描いたこの神や仏は、みんな人間の手で作ったものです。でもこの聖書の神様は違う。(聖書を読む)「この世界とそこにあるすべてのものをお造りになった神は、天地の主ですから、手でこしらえた宮などにはお住みになりません。…確かに(ナレーションに)、神は、私たちひとりひとりから遠く離れてはおられません。私たちは、神の中に生き、動き、また存在しているのです。…神は、そのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今は、どこでもすべての人に悔い改めを命じておられます。」(使徒 17:24, 27, 30)

ナレーション 時計が夜中の 12 時を打ちました。私の頭はもうろうとしてはいましたが、今、目の前にいる青年の明るい顔を見ると、心の底から喜びが沸き上がってきました。

ステイーヴ (祈る)神様、感謝します。私のつたない日本語にもかかわらず、あなたはこの青年をあなたのもとに導こうとしておられます。これはあなたのみ業です。アーメン！

ナレーション 翌日、私は彼を、その町のただ一つの教会に連れていきました。20 年間も牧師のいない教会でしたが、15 人ほどの信徒の方々が、彼を心から歓迎してくれました。彼は農業をしていましたが、なんと、その町の神社のお祭りを主宰する祭礼委員会のメンバーだったのです！ でも、彼らの反対にもひるまず、ほどなくその教会でバプテスマ(洗礼)を受け、酒もたばこもやめてその教会の忠実な信徒になりました。

音楽 (BGM)

## 【第2章 開拓伝道チーム】

ナレーション 軽井沢の宣教本部から、北海道の 7 つの地域に OMF として初めての開拓伝道チームが送られることになったのは、1952 年のことでした。1953 年が明けた新年、その開拓伝道の費用を巡って、軽井沢の OMF では、リバイバル=信仰の覚醒めざめが起こりました。OMF も参加していた TEAM(日本福音同盟宣教団)は、

100 人の宣教師を日本各地に派遣しようとしていましたが、その費用が不足にひたすら祈っていました。ある夕方の祈祷会で、一人の宣教師が立ち上がってこう訴えたのです。

宣教師(飯島) もし私たちが神様に、他の人々がささげるよう彼らの心を動かしてもらおうと思うなら、まず私たちが、自分のポケットに手を差し入れなければなりません！

ナレーション この言葉をきっかけに、人々は愛のない自分の罪を告白し、またその場で金や車や宝石類をささげると言ったのです。私自身も、改めて、一日も早く日本語の学びを終え、宣教に遣わされたいと祈りました。1954 年 5 月、私は、北海道から出てきたレナード・ストリート宣教師と、その通訳の日本人小野さんに、青森駅で会うように言われました。そこで落ち合った私たち 3 人は、3 週間の青森開拓伝道視察旅行に出発しました。最初に向かったのは、青森から車で 1 時間ほどの町、五所川原でした。元はたばこの製造工場だったところを使って伝道している五所川原教会は、40 人ほどの会衆が集っていました。そこを皮切りに、私たちは、太宰治の出身地である金木、弘前を訪れ、そこから、既に開拓を始めている 10 人の宣教師たちのアドバイスを聞くために、いったん青森に戻りました。そしてそこからは、私一人で旅をして、視察報告をまとめることになりました。独りで大きなトラクトバッグを背負い、揺れると天井に頭をぶつけながらの田舎道のバスの旅。バスの終点で降りると、さすがに心細くなりました。この青森の旅で、ほとんど閉口したのは、東北弁でした。ここはほんとに日本かと思うほど、それは全く理解不能の言葉でした。

ステイーヴ あの…、次の村までは、どのくらい歩きますか？

村人(小川) まんず、ワラジの 5 足<sup>そぐ</sup>も要るべな。

ステイーヴ ワ、ワラジ？

村人 あん？ ワラジ、アメリカにはねが。えーと、ワラで編んだサンダルだ。分かるが？

ステイーヴ オー、ワラ、ストロー。ストローのサンダル！ 分かりました。でもどうして 5 足も？

村人 いいが、あんだの足に 2 足<sup>そぐ</sup>、海風が強くなれば這<sup>うみかぜ</sup>って歩<sup>が</sup>けながら手にも 2 足、崖を登るときは鼻にも 1 足だあ。(笑)

全員 (村人) 笑う。

ナレーション よく分からぬまま、向かった町は津軽半島北端の今別でした。その小さな宿に泊まり、部屋で夕食を食べていました。もうすっかり慣れた定番メニューは、私のダイエットに貢献してくれる、ご飯とわかめの味噌汁、魚の干物に生卵でした。そこへ私と同じくらいの若さの青年が訪ねてきました。驚いたことに、聖書を手にしていました。

宿屋の青年(中橋) 私はこの宿の息子です。郵便局に勤めています。

ステイーヴ　これはこれは、初めまして。どうぞお入りください。

ナレーション　私は、暖かい味噌汁はお預けで、その青年の熱心な話を聞くことになりました。

青年　私は若いころ結核をやって、療養所に入り、そこでイエス様のことを知ったのです。その時以来、ずっとイエス様を信じたいと思ってきました。まだ分からないことがいっぱいあるのですが、誰も教えてくれる人がいないのです。一緒に祈る人もいないし、賛美歌も歌えません。私はこの辺では、キリスト教に興味を持っているただ一人の人間なんです。

ステイーヴ　どうしてあなたは、私のところを尋ねたのですか？ 私がクリスチャンだと、どうして分かりましたか？

青年　宿帳に“ステパノ”とありました。ステパノのことは聖書で読みました。あなたは宣教師ですよ。私に聖書の真理を教えてください！

ナレーション　それから私は、夜遅くまで、彼に聖書のことを話してあげました。あの時のキラキラ輝く彼の眼は、今も忘れません。今別を去り、彼と別れたあと、私はそこに住む人々への強い感情に突き動かされました。

ステイーヴ　(モノローグ)あの海岸線には、見渡す限り、小さな小屋のような家々が点在していた。あの人々は、代々漁をし、先祖崇拝と受け継がれた習慣を守りながら、家を守っている。彼らは、伝える人がいないため、キリストの救いの真理を学ぶ機会がないのだ…。

ナレーション　その頃までには、ミッションは、すでに北海道に 28 人の宣教師を派遣し、私を含む 15 人が、軽井沢で日本語を学んでいました。これまで話したように、在学中からもう宣教の働きは始めていたのですが、日本語、特に東北地方の方言を十分に理解するだけの語学力が、私たちにはまだ不足していたのです。しかし、開拓伝道の働きが急務であることは、本部でも十分に認識しており、その決定に基づいて、私は、カナダからの宣教師ドン・モリスと新たにペアを組み、一度訪れたことのある金木町で、4 か月間、開拓伝道をやってみることになりました。その時に福音を伝えた日本人のことをお話ししましょう。

効果音　(台風)

ステイーヴ　すごい雨と風だね、ドン。

ドン・モリス(中尾)　ああ。これが日本の台風だよ。お誘いしたあの若者たちは、聖書研究会に来るかな。

ステイーヴ　この天気じゃ、無理かもね。

ナレーション　それは、私たちがこの町に着いた最初の日曜日でした。私たちは、近くに住む共に 19 歳の、クリーニング屋さんの角田<sup>かくた</sup>さんと、もう一人の農家の青年に、夕方の聖書研究会に出てみるよう誘っていたのです。でも彼らはびしょ濡れになりながら駆け込んできました。

ステイーヴ　やあ、この雨の中、よく来てくれましたね。

ドン 濡れたでしょう。さあ中に入って、このタオルで拭いて。

ナレーション こうして聖書研究会が始まりました。家全体がガタピン揺れ、そのうち停電になり、なんとか見つけたろうそくをともしての勉強でしたが、2人は熱心に聖書を学びました。そして帰りに角田さんは、新約聖書を買って、大事に抱えると、雨の中を小走りで帰って行きました。津軽海峡では連絡船が難破し、1,100人以上の乗客の命が失われましたが、その中には、あの、自分の救命具を日本人の女性に譲って波間に消えた宣教師、ディーン・リーパーもいました。

角田(三俣) ♪マタイ、マコ、ルカ、ヨハネ伝、使徒、ロマ、コリント、ガラテヤ書。  
エペソ、ピリ、コロ、テサロニケ、テモ、テト、ピレモン、ヘブル書。ヤコブ、ペテロ、ヨハネ、ユダ、ヨハネの黙示 27、旧新両約合わせれば、聖書の数は 66♪  
ステパノ先生、新約 27 巻の名前、覚えましたよ！

スティーヴ おお、偉いですねえ！ 私にどこを言われても、これですぐ開けますね。

角田 はい。中身もだいぶ覚えました。この3週間で、新約をもう5回読みましたから。

ナレーション 半年後に、彼はバプテスマ(洗礼)を受けて、友達に熱心に伝道し、その中の一人、川村耕哉さんは、のちに人々にとても尊敬される牧師になりました。けれども角田さんは、残念なことにそれから数年後に莫大な借金を作ってしまい、横浜に逃げて行きました。彼の消息を、あるドイツ人宣教師から再び聞いたのは、45年後のことでした。がんになり、死期の近いことを知った彼は、教会を訪れて、人々の前で悔い改めの祈りをし、賛美をささげ、信仰を回復したのです。その最後に心を打たれた彼の奥さんと子どもたちは、それから教会に行き始めたそうです。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション もう1人、藤田さんのお話をしましょう。彼は、金木から徒歩3時間ほどの町の小学校の校長先生でした。彼とクリスチャンの友達は、私とドンのことを新聞で知って、私たちの教会を訪れ、一度彼の学校に来て話をしてくれるように熱心に頼みました。これもまた激しい嵐の日、私たちは彼の家を訪れたのですが、もちろん私たちは、彼にも信仰を持ってもらいたいと思い、熱心に聖書の話をしました。でも彼の反応はこうでした。

藤田(荒木) ステパノ先生、日本は変わりました。戦争が何もかも変えてしまったんです。私は、先祖の神々を捨てるにはもう年を取りすぎたが、子どもたちには、ぜひクリスチャンになってもらいたいんですよ。

ナレーション 私は彼の部屋の隅に祀ってある神棚を指さして言いました。

スティーヴ 藤田さん。もしあなたが、あのご先祖たちを最後まで拝みながら死んでいけば、お子さんたちは、今度はあそこに祀られたあなたを拝むことになりますよ。彼らは、あなたの霊がいつもこの家にいると信じるようになり、決してまことの神様に会うことはできません。それでもいいのですか？



ナレーション 彼はじっと黙って聴いたあと、しばらく考えていました。

藤田 分かりました。今から、キリスト教の道を求めていきたいと思います。

ナレーション 彼が本当にクリスチャンになるまで、20年かかりました。その頃私は青森市にいましたが、彼が顧客の一人だったあるクリスチャンの保険会社の外交員の方から、彼が聖書を学びたがっていると聞き、私から連絡して、20年ぶりの再会とバイブルクラスが始まったのです。ところが…。

藤田の娘(中橋文) (フィルター音) もしもし、ステパノ先生ですか？ 私、いつも父がバイブルクラスでお世話になっております藤田の娘です。

ステイーヴ ああ、藤田さんのお嬢さん。どうしましたか？

藤田の娘 (フィルター音) 父が階段を踏み外しまして。病院へ運ばれたのですが、脊椎を痛めて、腰から下がマヒしてしまいました。

ステイーヴ おおノー！ それは大変ですね。

藤田の娘 (フィルター音) そのため、おなかがとても痛いようで、見ていてもつらくて…。

ナレーション 私は大急ぎで病院に駆けつけました。

藤田 (弱々しく) ああ、ステパノ先生。私、もうクリスチャンになるには遅すぎるでしょうか？

ステイーヴ いいえ、そんなことはありません。あのルカ伝の、十字架の強盗の話を知ってるでしょう？ 彼は死ぬ瞬間に信仰の告白をして、天国に行ったんですよ。

藤田 先生。…信じます。キリスト様を、救い主として信じます。

ナレーション 数週間後、彼は亡くなりました。葬儀は仏式で行われたあと、教会で彼の望んだキリスト教式の告別式をしました。

藤田の娘 先生。ありがとうございます。仏教の葬式の間中、私は、父の魂が、まるで長い長い暗闇のトンネルの中を遠ざかっていくような感じがしていました。そこには何の希望もありませんでした。

藤田の息子(東) 先生、私もおんなじことを感じていました。でも教会の告別式で、本当に心が洗われ、天国が間近に感じられました。父は今、あれほどの体の痛みからも解放されて、イエス様と一緒に天国にいるんですね。

ナレーション その息子さんの目には、うっすらと涙が浮かんでいました。彼はのちに、クリスチャンになり、父との再会を待ち望みつつ、ご家族に証し＝信仰の体験談を話していました。

アナウンサー こうして、彼の日本での働きは、いろいろな経験を通して、少しずつ実を結んでいきましたが、そのとき彼はまだ独身でした。そして神様は、彼をさらに実りのある働きに用いるために、生涯の伴侶を備えておられたのでした――。

(第2部 完)